

大蔵谷における南北方向の地域形成：交通、生業、土地所有の着眼点の整理

鈴木遥

大蔵谷に関する拙論の課題

兵庫県明石市大蔵谷に関する先の拙論（鈴木、校正中）において、筆者は、大蔵谷に関する先行研究のレビューを行った。その結果、先行研究の多くが、大蔵谷宿の歴史や社会変化、地域づくりの実践などに関して行われてきたことを指摘した。こうした先行研究の考察を踏まえて、大蔵谷宿、そして大蔵谷全体への理解をさらに深める一視点として、大蔵谷という地域の中における大蔵谷宿の位置づけや、大蔵谷宿と周辺地域とのつながりに着目する視点があると考えられた。先の拙論では、大蔵谷宿とその北側にみられる周辺集落との間にみられた人々の移動や活動に着目することにより、その関係性への理解が深まりうると考察した。

しかしながら、先の拙論にはいくつか課題が残った。それは、人々の移動や活動に着眼することで地域間のどのような側面が理解できる可能性があるのかについて十分に考察できていない点であった。そのために、提示した着眼点の意義を、地域形成との関連において十分に明確にすることができなかった。ここが最も大きな問題点であった。この点を反省し、本論文では、先の拙論で提示した着眼点の意義を今一度整理し、これらの着眼点において分析を進める上での課題を考察する。これをもって、先の拙論の問題点を補いたい。

本論の目的

本論文の目的は、先の拙論で提示した三つの着眼点において大蔵谷とその周辺地域との間のどのような側面が理解できる可能性があるのかを整理し、各着眼点について分析する上での課題を明らかにすることである。

大蔵谷宿とその周辺地域のつながりに関する着眼点

はじめに、先の拙論で行った議論の概要を述べたい。その目的は、古くより交通の要衝地としての役割をもち、宿場町としても知られてきた大蔵谷に関する先行研究を整理し、何がどのように明らかにされてきたのかを考察し、大蔵谷の地域特性への理解をさらに深めるための課題を考察することであった。大蔵谷は明石市の東端に位置し、近世明石城下町の東、西は源平合戦ゆかりの両馬川と東は朝霧川に挟まれた地域である（明石民俗文化財調査団編 2017：16）。また、南北方向で見れば、大蔵谷は、朝霧川流域に位置する（竹内編 1988：285）。

第一に、大蔵谷という地域の名称と範囲の変遷を、先行研究などに基づいて整理した。大蔵谷の名称については、奈良期に大倉という地名が残っており、これが大蔵谷を指していると考えられている（明石民俗文化財調査団 2017：17）。しかし、その範囲の詳細についてはよく分かっていない。現在の大蔵谷の範囲に関して先行研究を整理した結果、その基礎となったのは、江戸期から明治22年（1889年）にかけて存在した大蔵谷村であると考えられた。大蔵谷村全体の範囲は、おおよそ、南の明石海

峡と北の六甲山地西端の台地とに挟まれ、西は明石城の東外堀、東は山田村（現在の兵庫県神戸市垂水区の南西端）の範囲とであった。また、朝霧川の谷筋一帯とその西側に広がる丘陵地、そして大蔵谷宿の範囲ということもできた。

第二に、大蔵谷に関する先行研究がどのような観点で行われてきたのかを分析した。その結果、先行研究は、大蔵谷宿の歴史に関する研究、近世以降の大蔵谷宿および大蔵谷の社会変容に関する研究、大蔵谷宿の地域づくりの実践に関する研究の三つに大きく分類することができると考えられた。ここから、先行研究の傾向としては、大蔵谷宿に関する研究が多くを占めていたことが指摘できた。この理由としては、大蔵谷宿が西国街道の宿場の一つであり、このことが地域形成の主軸となってきたと理解されてきたことが関係していると考えられる。また、大蔵谷と大蔵谷宿という地名の関係は、先行研究の中では、宿場が置かれた地域としての大蔵谷というように同義で用いられることもあった。

先行研究の分析を踏まえ、大蔵谷の地域特性への理解をさらに深める上での課題を考察した。大蔵谷宿そのものに対する理解を深めてきた先行研究に加えて、大蔵谷宿が周辺地域との関係の中で形成されてきたという観点は、新たな側面への理解が進む可能性があり、重要な一視点と考えられた。大蔵谷宿は、地域内部でその社会や文化が完結しているのではなく、絶えず外の地域との関係の中で形成、変容してきたと考えられる。また大蔵谷宿の名称や範囲の変遷を見てきた中でも、大蔵谷宿とその外の地域との境界は、これまでの歴史の中で何度も変更されてきており、場合によっては不明瞭なことがあった。また、大蔵谷宿の宿としての機能に眼を向けると、人や物資の出入りは重要な地域特性だと考えられる。これらのことから、大蔵谷宿が、周辺の地域との様々な相互関連の中でどのようにその範囲が形成され、変容し、さらに宿場としての機能が成り立ってきたのかを考えることは、大蔵谷の地域特性への理解を深める上で重要な視点となると考えられた。

大蔵谷と周辺地域との関係を捉える上で、大蔵谷という地域は、それ自体が内包される最も身近な地域の一つである。先の拙論では、大蔵谷宿とその周辺地域とのつながりを取り上げ、これらの間にはどのような相互関連があり、それが大蔵谷宿の変容にどのように関連しているのかを理解するためには、どのような観点での分析が有効であるかを考察した。大蔵谷における大蔵谷宿の周辺地域との関係は、沿岸に位置する大蔵谷宿とその北側に広がる周辺地域というような地理関係でおおよそ理解できる。先の拙論では、大蔵谷宿とその北側に位置する集落間の人々の移動や活動を南北方向の地域間の相互関係と捉え、それを捉えるための着眼点を三つ提示した。それらはすなわち、交通、生業、土地所有であった。

三つの着眼点の意義と課題

以上で述べた先の拙論の内容を踏まえて、以下では、そこに残された課題を検討する。先に述べた三つの着眼点それぞれについて、大蔵谷宿と周辺地域の間でのどのような側面が理解できる可能性があるのか、そして各着眼点で分析を進める上でどのような課題があるのかについて整理したい。

一つ目の着眼点として挙げた交通に関しては、特に南北方向の交通である河川や陸路に着目することで、大蔵谷宿とその北側に広がる集落との間での人々の移動や物資の流通などを理解することができると考える。その中では、大蔵谷宿が発展していく中で南北方向の交通がどのように活用され、整備されてきたのか、河川や道沿いなどに周辺集落が形成されてきた過程、大蔵谷宿の機能を労働や物

資などの側面で周辺集落がどのように支えてきたのかなどについての理解が深まる可能性があると考えられる。

この着眼点を提示する上で参考としたのが、榎原（2000）の議論であった。榎原（2000）は、15世紀の山陽道における播磨、備前国の事例において、山陽道と河川がクロスするところに宿場町が発達すると考察し、宿場町が発達において河川による南北方向の交通が深く関わっていることを指摘した。この指摘は、大蔵谷宿とその周辺地域との関係を考察する上で大変示唆的である。しかしながら、この分析は河川流送が行われるような比較的大きな河川を対象としたものであったため、大蔵谷にそのまま当てはめることができるかどうかは検討の余地がある。大蔵谷の場合、上記した先行研究が街道と河川の交差点に宿場町が発達すると指摘したように、西国街道と明石川の交流点に大蔵谷宿が発達したというように考えることができる。明石川における物資の流送と大蔵谷宿との関係について、まずは分析する必要があるだろう。しかし一方で、大蔵谷宿とその周辺地域の関係をより捉えようとするならば、かつて大蔵谷宿に流れていた両馬川、新川、朝霧川という三つの河川についても考察する必要があると考えられる。これらの河川が物流に使用されていたのかどうか、使用されていなかった場合他に果たしていた役割があったかどうか、それらが宿場町とどのように関連していたのかということを検討することで、よりミクロなレベルで地域間の関係性を考察することができるのではないかと考えられる。

また、大蔵谷の場合、河川に加えて陸路も南北方向の人々の移動や物資の流通を支えていた可能性がある。人々の移動や物資の流通の目的は様々であったはずであり、どのような目的があったのか、どのような目的の時にどのようなルートが選択されていたのかなどについて、整理して分析する必要がある。また、どの時代を分析対象にするのかについては、慎重に検討する必要がある。特に陸路の分析においては、自動車の普及および車道の整備は、人々の移動と物資の流通の量や質、ルートなどを大きく変更したと考えられ、この時代の前後の分析は特に注意が必要だと考えられる。

次に二つ目と三つ目の着眼点として挙げた生業と土地所有に関して、考察を加える。これらの着眼点は密接に関連すると考えられるため、二点同時に考察を進める。もちろん、一点目の交通についても関連する点が多いと思われるため、三つの着眼点の関連についても、後で考えたい。生業と土地所有については、大蔵谷宿とその周辺集落との関係では、農業や森林に関わる生業、そして農地所有などが特に重要となるのではないかと考える。大蔵谷における地域形成の過程がどのように進んだのか現時点で筆者は十分に分かっていないが、沿岸や河川や陸路沿いから内陸へと人々の居住域や衣食住をはじめとする生存に必要な資源生産の活動域などが広がっていったのではないかと想像している。その中で、おそらく森林であった場所が拓かれ、居住地や農地へと転換されてきたと考えられる。この仮定が正しいかどうかについては、今後分析を進める中で繰り返し問い続けなければならないし、必要に応じて柔軟に方向修正をしなければならない。

農業や森林に関わる生業と農地所有からは、森林が開拓され居住地や農地へと転換されてきた過程、大蔵谷宿に生きる人々の生業や農地所有の変容などについての理解が深まる可能性があると考えられる。大蔵谷宿に生きた人々は、様々な暮らし方をしていたのではないかと想像される。大蔵谷宿がある低地に暮らしながら朝霧川中流に所有する農地で農業を営む人や、もともとは大蔵谷宿に暮らしていたが中流や上流に移住した人などもいたかもしれない。また、大蔵谷全体で考えると、他の地域から移住してきた人や、そもそも中流域や上流域に古くから暮らしていた人などもいたことが想像される。

生業については、米や野菜などの栽培、また農業以外にも、例えば炭焼きや漆掻き、狩猟、材木や薪炭材の生産、瓦生産が盛んだった時代には粘土の生産や運搬に関わる生業を行う人などがいたのではないかと想像される。

人々にとって何が生業となり、どのような土地所有が行われるかということは、その時の森林の開拓状況や資源の商品価値などの社会経済状況、ローカルな権力関係などによっても規定されてきたのではないかと考えられる。先に挙げた交通についても、生産された資源の流通や土地へのアクセスなどに深く関係してきたと考えられる。生業や土地所有に着目して分析をする上では、こうしたこれらを取り巻く地域の状況との関連を念頭に入れる必要があると考えられる。

以上で述べた内容を総合すると、三つの着眼点において大蔵谷宿とその周辺地域との関係を通時的に分析することができれば、大蔵谷における南北方向へと人々の活動が広がっていった過程とその社会的・経済的・文化的な意味、大蔵谷宿に生きた人々の社会的・経済的基盤の形成と変容過程、森林開拓による居住地や農地への転換過程などについて理解を深めることができるのではないかと考えられる。

おわりに

本稿では、先の拙論で提示した三つの着眼点において大蔵谷とその周辺地域との間のどのような側面が理解できる可能性があるのかを整理し、各着眼点について分析する上での課題を考察した。わずかではあるが、三つの着眼点の意義について、自分なりに整理することができたように感じる。また、今後分析を進めていく上での課題も現段階でできる範囲では整理できたと思う。今後は、どのような研究方法で、どのような分析ができるのかを具体的に検討していく。そのためには、分析に用いる資料を検討し、どの時代の何について分析するのかを詰めていく必要があると考える。そして、本稿で考察した意義や課題を、分析内容と照らし合わせながらさらに深めていきたい。

謝辞

本報告は、科研費 19K12491 および 2021 年度神戸学院大学人文学部研究推費（研究課題：「兵庫県明石市大蔵地区とその周辺における人々による自然資源の利用とその変容」）の助成のもとに実施しました。

参考文献

明石民俗文化財調査団編（2017）『明石の宿場―「宿場と人々の暮らし」―』明石民俗文化財調査団。

榎原雅治（2000）『日本中世地域社会の構造』校倉書房。

角川日本地名大辞典編纂委員会編（1988）『角川日本地名大辞典 28 兵庫県』角川書店。

鈴木遥「兵庫県明石市大蔵谷に関する先行研究レビュー―宿場町とその周辺とのつながりの理解に向けて―」『神戸学院大学人文学部紀要』第 42 号、ページ未定（校正中）。